

震災日記

高原万里子

三月十一日（金）風寒く夕方から時々雪

電車か車か迷って、九時半頃車で福島へ。みずほ脇の駐車場に車を入れ、手芸店で黒貝ボタン、伸び止めテープ、皮用針、マジックテープ。中合で頼んでおいた靴。本二冊。パパゲーナで、くるみといちぢくのパン。

帰ってお昼を食べて皿を洗っていると激震。ストーブを消し、縁側の戸を開ける。電線、池、松の木大きく揺れる。部屋履きのまま外へ飛び出し、しゃがみ込む。鳥の群れが、黙って、凄いいスピードで飛んで行く。地鳴りと家鳴り。雷が鳴った。車のキーを取りに戻って、車の中に避難する。ひっきりなしの地震で、吊り橋の上に居るようだ。明るいうちは本を読んでいる。暮れて来て横なぐりの雪。この世の終りのように寒くて暗い。夜、あやちゃんの家で、ろうそくの灯りでカップラーメンを食べる。リビングで雑魚寝。余震のたびに、皆ばね仕掛けのように起きる。

三月十二日（土）

早朝、携帯電話で起こされる。河北新報の号外。ヘリからの写真、瓦礫の町、火災の町。朝日新聞の号外は来ない。家にビーフシチューと御飯取りに行く。棚の陶器がころがり落ちて小皿が一枚割れ、居間では電気スタンドの球が割れ、電気ポットが落ちて、巻き添えで急須、鉢割れている。台所では、レンジのミルクティーが飛び散って、観音開きの食器棚は無事。

大槻さん、ダンプから皆なの携帯の充電してくれる。夕方、山田さんから暖かいおにぎり、缶詰、トマト。吉徳さん四〇のペットボトルで水持って来る。様子を見に来た文子さんと家の周り見ると、裏の瓦落ちていて。窯小屋は目で見た範囲では損傷なし。

福島原発危険と息子よりメール来る。夜十時前、孝子さんのメール最後に圏外になる。

トイレは流さない方が良いと言われ、バケツを使う。やっぱり、あの白地に花模様のお瑠璃の馬桶、買ってくれば良かった。荊々が機関銃のような上海語で妨害したんだ。

三月十三日（日）

朝、太陽の周りが濁っている。空中に悪い粒子がいっぱい漂っていて、光にからみ

ついている。精油所も、火力発電所も、街も燃えて、原発も爆発した。

公報車が給水を知らせて走る。公衆電話まで歩いて行く。踏み切りの中に貨物列車の最後が残っていて、遠廻りで歩きにくい。水を下げた高橋さんに会って、公衆電話は使えないと言われる。文字さん家へ行く。御主人も交えて、コーヒーを淹れる方法を考える。すり鉢とすりこ木で、濁る前に汲んできた湧水で、最高に贅沢な一杯を神経を集中して味わう。卵色のクロッカス、冬木のままの枝先で百舌が忙しげにしている。

三月十四日（月） 妙に暖かい

原発三号機も爆発。かつちゃんとうち葉町に刺身定食を食べに行った時見た、蜃気楼のような蛭々と続く建造物。人工的で近代的で、不気味な悪の帝国みたいだった。

駅前の給水車にあやちゃんと行く。広口の入れ物というので漏斗持参。あやちゃんはすっぴんで、裸みたいな感じか聞いてみる。

お風呂に入れなくて獣じみて来る。時代劇の病人みたいに、スカーフで頭をくるむ。午後、ラジオで聞き捨てならない情報キャッチ。日本の災害救助法には、ヘリから物資や食糧を投下出来ない決まりがあって、陸路ルート確保に懸命なんだそうだ。道理でヘリの数が少ないわけだ。蝗の群れみたいに、空が曇る程飛ばなきやいけない時間なのに。

進駐軍の投げるチョコやチューインガムに群がった子供を屈辱と考えた役人がこねくり出したきまりを、皆な忠実に遵守してるわけだね。義を見てせざるは勇なきなりを、荒塩と一緒にのみ込んでやるっ。胃袋のあたりが脈打つように腹が立つ。M四以上の余震、二六〇回超す。

三月十五日（火）

すり鉢コーヒーを淹れていたら、あやちゃん来る。時間と手間をかけたコーヒーを飲む相手としては不満。まあ、でも私の人生こんな風に過ぎて来た。あやちゃんは、そんな私の気分に気付いていて、真っ赤な唇に煙草を啜える。

原発二号機も爆発。健康に影響ないと東電しどろもどろ。あやちゃん乗せて、車で水もらいに行く。公民館に廻って新聞取って来る。

五万ドルの義援金を送るといふ、アフガニスタンのカンダハル市長の談話を読んで泣き、バングラデシュ、救助隊の派遣準備完了の記事を読んで又泣く。

三月十六日（水）朝、雪景色

原発四号機火災。NHKラジオでは東北関東大震災、地方紙では東日本大震災と報じている。関東がなんで入っているのかわからない。料簡が狭い人間だから、面白くない。

被曝を防ぐ注意をしつこく繰り返すラジオに向って、水が出ないんだけど、どうすればいいの、と言ってやる。

仕事に行くあやちゃんの車で公民館まで行く。『新聞ありません』の紙が二枚ドアの境目に貼ってある。入って来るな、の根性悪さ感じる。携帯の充電も公衆電話の設置もしない。駅で、水をさげた文子さん夫妻に会い、腕を上げたというすり鉢コーヒー飲みに行く。

午後から三人で岩風呂に行く。石鹸もシャンプーも使えないので浸るだけ。嬉しくて、一時間以上出たり入ったりする。国道は信号なし、ガラガラでノンストップ。

夕方、ようやく電気来る。夜、かっちゃんから電話。平安時代の地層にある津波の跡より、今度の方が大きいらしい。

三月十七日（木）朝、銀世界

放射能が入っていたって雪は雪だ。駅前給水に並ぶ。過疎地だから待ち時間ゼロ。帰り安藤さんに軽トラックに乗せてもらう。くつきりと人柄が出てしまう。

今までにない円高だって。大勢の人が泣いている時が儲け時なんだ。罰って人非人にあたった話しは聞いたことがない。悪は栄える。神も仏も、権力財力備え持った者達には罰をあてない。微力な庶民に全量の罰を振り分けるんだ。作家あがりの老知事、天罰だって言ってるもんな。

海外のメディアは、沈着冷静って被災者を賞賛してるそうだけど、日本人には骨の髄まで染みついてるんだ。お上は何もしてくれないって。困った時ほどあてにならないって。

三月十八日（金）朝粉を振ったような雪

朝、給水に並ぶ。お昼のバスで文子さんと白石駅まで行く。販売所で新聞もらう。スーパーの行列では、最後尾に立っている店員がこれから並んでも品物はないと言う。イルパツソで、コーヒー飲んで帰って来る。バスの窓から、道路陥没、マンホール隆起、ブルーシートの屋根。文子さん家まで行き、カレーもらって帰宅。在来線のレール錆てきた。

三月十九日（土）

朝、水が出たってあやちゃんから電話。お湯になるのを確かめて、即洗面台に頭突っ込んで髪洗う。車で白石まで行って、皆なの分も新聞もらって来る。節子さんからもやし、さつまあげ、グレープフルーツの差し入れ、売っていたものだけ。

原発関連で郡山市長、早い段階でアメリカの協力を断った政府を批判。福島には、遺体捜索も救援隊も行かない。あの辺の海、昔夏休みになると毎年行っていた。半世紀前だ。

お風呂大掃除して、風呂!! ボイラーが壊れた文子さん夫妻入りに来る。遠慮して二人で入る。正統派夫婦、妬ましい。見送りに出たら十四夜月皓々。テレビでばかばかしく思う事、つかえながら原稿読みに出て来る政府の人も東電の人も、なんで作業着なの。汚れ仕事なんか一生しない癖して。生地なんか底光りしていて、いかにも高そう。

三月二十日(日) 満月だけど曇り

朝、回覧板を返しに行った高橋さんに、雨漏りの不安もしたら、直し屋さんの家へ一緒に行って頼んでくれる。途中、露の藁探っていたら、私より先に家へ着いている。落ちた瓦は、屋根瓦でないから雨漏りはしないと受けあってくれる。お礼をしたいと言っても、断固ことわられる。陶コップもらってもらう。

三月二十一日(月) 曇り

首相が、現地視察悪天候を理由に中止。曇っているけど、風雨なし。そういう理由で中止すると、他のへりも自主規制で飛ばなくなるんじゃないの。

三月二十二日(火)

朝のクラシック倶楽部、ペーター・レーゼルでベートーヴェン。この頃、好きでないけど良いと思う。老化現象だ。

バスで白石の郵便局へ行って、自然葬契約書を簡易書留にする。機械の前でまごまご予納金を振り込む。婆さん丸出し。

ふじ子さんに会って、ランチを食べる。異口同音に肉を選んで、笑ってしまう。夜、文子さん、風呂に入りに来る。御主人は胃痛で寝込む。昨日の視察中止は、現地の受け入れ準備で業務が滞るという事らしい。非常時にも、形式を優先させる滑稽さ。菅さんて、草の根の人なんだから炊き出しのボランティアすればいいのに。せつかく作業衣着てるんだから。それから、岩手が地盤の派閥の主がいた筈だけど、死んだふりか。

三月二十三日（水）

福島や茨城の野菜が出荷停止。なんで不安煽ることばっか言うかなあ。ほうれん草毎日一キロは、ポパイだって食べない。

想定外って言い訳使っちゃいけない。原子力の学者って御用学者ばかり。原発って、叡智の結晶で絶対安全だったんでしょ。傲慢で胡散臭い。やっぱり叡智なんて、それぐらいのもんだったんだ。

桜は黙って咲くのに、花見自粛なんて失礼じゃないか。今年は、豪華弁当作って三春の滝桜に行くことにする。